青森県小中学校教頭会会報　第115号

あおもり

目　次

１．巻頭言 …… 1
２．学校訪問（西北教育事務所　坂本雄大） …… 2
３．会員の広場「ナナカマド」 …… 3
４．全国大会（岩手大会）報告 …… 15
５．知っておきたい職場の法律 …… 19
６．編集後記 …… 20

巻頭言

朋有自遠方来，不亦樂乎
～県研究大会の持つ意義を改めて考えて～

上北地方小中学校教頭会　会長　今　泉　勝　徳

これまで足掛け３年に渡る新型コロナウイルスの感染拡大が第７波まで広がり，完全な収束が見通せない中，各校の教頭先生方におかれては，これまでコロナへの対応・対策に陣頭指揮を執り，多忙を極める日々ではなかったかと思います。加えて今年の夏は，津軽地方を中心に豪雨による甚大な被害がもたらされ，御自身も被災者になられた方もあろうかと思いますが，そのような状況下においても，生徒の安全，職員の安全，施設・設備の確認等しなければならないなど，学校の要として日々御尽力なされてきた御苦労たるや，想像に絶するものではなかったかと推察いたします。

それでも，このコロナ禍の３年間の中で得た経験・知見・見識をもとに，校内での感染対策を徹底しながらも，子どもたちの学びを止めまいとの強い思いをもって，「新しい生活様式」の中で試行錯誤しながら，数多くの教育活動を実践してきたことと思います。

さて，上北地方は，令和５年度青森県小中学校教頭会研究大会の主催地区となっております。例年であれば，教頭としての資質向上のために県内各地の小中学校の教頭先生方が約400名程度参集し，各分科会に分かれ，グループ討議を行うなど協議会形式で行ってきたところです。しかしながら，前回大会である東北大会兼弘前大会では，最後まで参集型での実施を模索していましたが，新型コロナウイルス感染症の感染拡大が猛威を振るう中，最終的には紙面発表開催という形を取らざるを得ない状況となりました。

また，今年度の全国大会兼東北大会岩手県大会においても，ハイブリッド型での開催を予定しておりましたが，開催直前に新型コロナウイルス感染症が全国的に爆発的な拡大を見せたことで，開催日直前の７日前に実施方法をオンライン型へシフトするといった大きな変更がなされ，多くの方々が御苦労なされたことは想像に難くありません。

上北大会の開催は11月２日の１日日程を予定しており，現段階で，参集型，ＺＯＯＭを活用しての配信型，ハイブリット型のいずれの方法が良いのか，今後議論を重ね，早い段階で決定していく予定です。実施方法につきましては，様々な御意見があろうかと思いますが，コロナ禍という社会状況を考慮し最善の方法・形で実施していこうと考えております。青森の教育を支える教頭先生方の真の学びの場になるよう努力していきますので，何卒御協力のほどよろしくお願いいたします。

ところで，社会科教師の端くれの私ですが，１学期に１年の歴史の授業で孔子の「論語」に触れる機会がありました。教頭先生方には釈迦に説法になりますが，論語の一説の「朋有自遠方来，不亦樂乎」の意味するところは，「同じ志を持つ者が遠くから集まり一緒に学ぶ。なんと素晴らしいことではないか」ぐらいのものです。学校現場はコロナ禍によって様変わりし，研究会等も中止が相次ぎ，先生方が膝を突き合わせて話し合う機会が激減しました。しかしながら，我々教頭職にあるものは，現在行われている教育改革に取り組み，学校の進むべき道を見定め，校長の意を受け，日々の学校運営に全力であたらなければなりません。それとともに実践研究の充実を図り，教育者としての教養と専門性を磨き，管理職としての自らの職能の向上を図ることはもちろん全職員を巻き込んでの協働体制を構築していかなければなりません。加えて，日々刻々と変わっていく新型コロナウイルスの状況を見定めながら，安心安全を最優先した学校経営がなされるよう組織のマネジメントにも取り組まなければなりません。

次年度の研究主題は第13期「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」とし，＜自立　協働　創造＞をキーワードとした１年目の研修となります。このようなコロナ禍の御時世だからこそ，同じ教頭職に就くものとして，お互いの考えや悩みを共有し，相談しながら，目の前の子どもたちの健全育成のため，最善の対応を研修する場が必要ではないかと考えています。形は変われど情報交換の必要性は不易なものであり，次年度開催予定の上北大会では先生方の「横の繋がり」を大切にして，研究を進めて参りたいと考えています。

来年11月，晩秋の十和田湖・奥入瀬渓流の紅葉が最盛期の上北の地で皆様とお会いできることを楽しみにしております。

職員室の担任として

西北教育事務所
所　長　**坂　本　雄　大**

青森県小中学校教頭会　会報「あおもり」115号が発行されますことを心よりお喜び申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の影響により社会生活や学校での活動に大きな変化が出始めてから２年以上経過しました。コロナ禍において，学校の危機管理体制を強化し，子供たちの命と安全を守りながらも，子供たちの健やかな学びの場の確保に御尽力いただいている教頭先生方に深く感謝申し上げます。

さて，今回は，各教育事務所が行っている所長による学校訪問の際に印象に残ったことをお伝えします。

１点目は，「全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学び」の実現に向け，ＩＣＴの活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備が積極的に進められていることです。

訪問した学校では，いつでもＩＣＴ機器を活用できるよう教室のネットワーク環境等が整えられるとともに，各教科の特質や児童生徒の実態に応じ，学習に対する動機付けや学習内容の理解促進に結び付く工夫等がなされていました。

さらに，少人数指導やＴＴ指導を効果的に取り入れ，個に応じた指導の充実を図っている学校も多く見られており，また，特別な教育的支援を必要とする児童生徒が通常学級に多数在籍することから，外部講師による校内研修の実施や，校内特別支援コーディネーターを中心に学校全体で対応するなど，様々な形で努力している様子が見られました。

２点目は，不登校児童生徒の増加と学校の組織的な対応です。

西北管内でも不登校児童生徒数は増加傾向にあり，校内一巡の際に児童生徒全員がそろっている学級は少ないように感じました。各学校においては，主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう児童生徒を見守りつつ，不登校のきっかけや継続理由に応じた環境づくりのための適切な支援や働きかけを粘り強く行っていました。また，別室登校する児童生徒に対して，教頭先生始め全職員が関わって支援を組織的に行っている学校も多くみられました。

当事務所では，不登校児童生徒支援対策研修会の開催や，学校訪問へＳＳＷを帯同させるなど，今年度は不登校問題の解決に向けて重点的に取り組んでいるところであり，今後も市町村教育委員会や学校と連携した支援の充実を図っていきたいと考えております。

３点目は，学校における働き方改革への取組です。

訪問したすべての学校の教頭先生に働き方改革への取組状況についてお聞きしました。タイムカードによる職員の勤務時間管理や，行事の見直し，ノー残業デーの設定など，各校の実態に応じて無理のない範囲で着実に進めている学校が多いように感じました。そして，職員と適切にコミュニケーションを図り，風通しの良い職員室経営に努めることをすべての教頭先生が大切にされていました。教頭先生自身の働き方改革の状況について尋ねた際には，苦笑いしながら返答に困る方が非常に多く，皆様の置かれている現状を推察することができました。

最後に，教頭の職務・役割についてです。

学校における教頭の職務は，学校教育法（昭和22年法律第26号）に①校長を助け，②校務を整理し，③校長等に事故あるときは職務を代理し，④必要に応じ児童生徒の教育をつかさどると規定されております。すべての公務員は法令又は条例に基づいて業務を行うこととなっているため，学校において行われるすべての行事や取組などが法令等に違反していないか，根拠となる法令は何か等をチェックすることも管理職である教頭の大切な職務であると考えます。一教諭として様々な行事や取組などにかかわっていた時とは異なった視点で見ることが必要となります。

学校教育には教育の基盤となる不易の部分を守りつつも，時代の変化に即して学校運営に創意工夫をこらすことが求められています。

教頭先生の皆様におかれましては，郷土に誇りを持ち，多様性を尊重し，創造力豊かで，新しい時代を主体的に切り拓く児童生徒を育成するため，校長の示す学校経営方針の下，教職員一人一人がそれぞれの持ち味を発揮しながら，協働的に教育活動を推進することができる職場環境づくりに努め，教職員から信頼される「職員室の担任」として御活躍されることを期待しております。

会員の広場

ナナカマド

初心を忘れず

青森小支部・堤小
山　﨑　　敏

本校は，校舎西側には北斗高校，校舎北側にある校庭の向かいには中央市民センター，徒歩圏内にリンクステーションホールやＮＨＫ青森放送局があり，市内中心部文化ゾーンに位置している。校内巡回時には，３階教室の窓から住宅街の向こうに八甲田山の雄大な姿を眺めることができ，錯綜する日々の中で，心が安らぐ貴重な瞬間である。

教頭職に就いて約半年が過ぎた。赴任当初は，各種提出物と新型コロナウイルス対応，ＰＴＡ対応，保護者対応，学校徴収金処理に追われる日々だった。この間，校長先生から様々なことを丁寧に教えていただき，教務主任をはじめ，教職員に支えられ，保護者や地域の方々に見守られながら，何とか乗り切ることができた。本当に感謝の気持ちで一杯である。

ところで，本校に赴任してから最も自分にとって新たな未知の分野の業務と感じられたのは，「学校運営協議会（コミュニティースクール事業）」である。これまでイメージしていた地域との連携事業のイメージの枠を超え，ダイナミックにかつ細やかな対応を求められることに気付き，戸惑うばかりだった。まずは，ＰＴＡ関係者はもとより，町会長をはじめ，地域の方々と面識をもち，対話する機会を逃さないように心掛けることから始めた。幸い，今年は数年ぶりに「地域子供ねぶた運行」を復活させた町会があり，学校施設を集合・休憩場所として開放し，地域の皆様とコミュニケーションをとる機会を得た。これからも，校長先生の指示のもと，浦町中学校区の各学校の先生方，学校運営協議会委員，ディレクターと連絡を密にとりながら，教頭としてやるべきこと一つ一つに丁寧に取り組んでいきたい。

自分にとっての新たなステージが堤小学校であることに感謝し，本校グランドデザイン「知恵・やさしさ・たくましさを身に付け，自立的・協働的に行動できる子どもの育成」の実現を目指し，初心を忘れず，地道に精進していきたいと思う。

「ねぶた」がまわる学校

青森小支部・橋本小
横　山　由紀夫

本校は創立145年の歴史と伝統のある学校である。青森市中心部に位置し，青森ねぶた祭の運行経路の内側に位置する世界で唯一の学校である。今年は３年ぶりに青森ねぶた祭が開催された。ねぶた期間中は，管理上の関係で，職員室から囃子を聞きながらねぶたが通過するのを見送った。毎年，観光客として楽しんでいたので，何とも不思議な光景であった。

本校の大きな課題の一つは，児童数の減少である。かつては500名を超える児童数だったのが，令和４年度は全校児童32名である。内訳は単式１学級，複式２学級，１学年は０である。

「小規模校は児童数が少ないので先生方は大規模校より楽しているのではないか。」などというイメージをもっている人が世間にはいるが，実態はそうではない。一人の教員にかかる仕事量は大規模校と変わらない（昨年まで大規模校勤務）。校務分掌の役割がいくつも重なり，校務上の委員会や会合を開けばほとんど同じメンバー，教育委員会からおりてくる事務文書の処理量は大規模校と同じ，出張や年休が重なると補欠体制に苦慮し，手のかかる子への特別な支援や保護者対応，など，決して楽なわけではない。本校の先生方は多岐にわたる仕事一つ一つに丁寧に一生懸命向き合っている。子どもたちはそんな先生方の姿勢をみて，一生懸命に応えてくれる素直な子ばかりだ。そして，毎年学習発表会で伝統の「ねぶたおどり」を披露している。

教頭として赴任した４月当初は不安と恐怖の連続だった。半年過ぎた今はあの頃よりは見通しがつくようになってきた。半年の間にいろいろなことがあったが，先生方と子どもたちの姿に何度も励まされてここまできている。まだまだ職務に自信がもてず不安な日々が続くが，学校の周りをねぶたがまわる学校として誇りをもつ子どもたちのために，子どもたちの「ねぶたおどり」がいつまでも続けられる平和な学校のために，今自分ができることは大きくないが，確実に地道に職務に全力を注いでいこうと思っている。

教頭になって

青森中支部・油川中
工　藤　哲　也

平成10年４月１日，青森市立油川中学校で私の教員人生がはじまった。そして，令和４年４月１日，今度は教頭として油川中学校に勤務することとなった。

「三つ子の魂百まで」ということわざをよく耳にするが，私の教師人生も，出来たこと・出来なかったこと，全て最初の３年間に凝縮されている。

まずは，当時校長先生からのこの４つの言葉が忘れられない。「Vitality（活力，持続力）のある生徒を育ててほしい。」「Specialty(専門性) を発揮する生徒を育ててほしい。」「Originality（創造力）のある生徒を育ててほしい。」「Personality（個性）を発揮する生徒を育ててほしい。」この言葉は，生徒はもちろんであるが，我々教員に向けられた言葉であったように思う。その一つ一つの持つ意味を考え実行することは当時の私には至難のことだった。自分的には，「Vitality」だけは，身に付いたと思っている。

また，大切な先輩との出会いもあった。その先輩教師は，授業では「Specialty」，仕事では「Originality」を発揮し，「Personality」をもって，部活動を大変強くして優勝させる人であった。厳しくも愛情にあふれ，それが教員にも生徒にも伝わっていた。その先輩の言動等をただ真似をすることから始めたことが，今となっては良かったと思っている。

当時の油川中学校は，習熟度別学習を取り入れ，ボランティア活動に力を入れるなど雑誌や文部科学省からも注目される学校であった。現在の油川中学校は，それぞれの委員会や行事に工夫を凝らした活動が盛んに行われている。Ｖ・Ｓ・Ｏ・Ｐの精神で，トラスト活動（縦割り活動）を中心として築き上げてきた創造性あふれる活動が，先輩から後輩へと脈々と受け継がれてきたことを実感している今日この頃である。

健康管理に努め…

青森中支部・浪岡中
村　田　正　茂

浪岡地区は，５つの小学校と本校（浪岡中）をはじめ，高校や養護学校など，多様なジャンルの学校が勢ぞろいしている教育施設の充実した地域です。地区には空港があり，コロナ禍以前はアメリカメイン州と交流が行われ，世界との繋がりを感じる数々のオブジェが校内に陳列され，来校者を迎え入れています。

また，本校は部活動が盛んで，各種大会で好成績を残しています。これもひとえに，幼少期から地域一丸となって運動に励む子供の育成に取り組んだ，リンゴに匹敵する産物に他ならないと感じた４ヶ月でした。

さて，私事ですが，縁あって相撲競技に携わる機会をいただきました。青森市は平成15年を最後に競技が途絶えていたため，生徒保護者からの要望を受け，新規に組織の立ち上げが不可欠となり，競技委員長を仰せつかった次第です。間近で見る生の相撲は，中学生とはいえ迫力があります。

関取の頂点である横綱に本校の卒業生がおり，その写真が玄関ホールに飾られています。四股名は「隆の里」。二子山部屋にスカウトされ浪岡高校を中退し上京。角界入り後はなかなか芽が出ず，更には食べることが仕事の力士としては致命的な「糖尿病」を患ったものの，長い治療の末大病を克服し大関に昇進したのは29歳のときでした。その昇進伝達式で述べた口上が，「健康管理に努め…」だったそうです。遅咲きの力士は30歳で横綱に昇進し，その我慢強い姿から付いたあだ名が「おしん横綱」。今の生徒に最も必要なレジリエンスを見事に体現してくれたお手本が，玄関ホールで常に見守っています。

「健康管理に努める」ことは，自分のパフォーマンスを最大限に発揮する上で，最も基本的で且つ難しいことなのかもしれません。コロナ禍で開催される多くの大会でもそれを感じます。常に自分と向き合い，決して逃げることなく，時間がかかっても焦らず着実に前を向き続けた大先輩に倣い，逆境に強い子供たちのＤＮＡを最大限に発揮させ，校長の目指す「地域・社会に貢献できる人材を輩出する学校」となれるよう，この地にじっくりと腰を据え，がっぷり四つに組んで教育活動に邁進したいと思います。

地域や保護者の大きな力

弘前地区小支部・自得小
田　村　　修

４月１日。新年度最初の業務は，赴任の挨拶状を持って地域を回ることでした。リストにはたくさんのお名前が書かれてあり，地域に支えられていることを強く感じました。直接御挨拶できた方は数名でしたが，初対面の私にみなさんが笑顔で接してくださり，学校に協力的なことが分かりうれしく思いました。

・ＰＴＡ総会・役員組織会では「とにかく集まりましょう。」と会長，副会長が中心となって活動の計画を確認し，協力を求めました。何をどのように進めたらよいか分からない私にとって，頼れる役員さんたちの集まりでした。
・リサイクル運動では，地域や家庭の廃品を回収し，教育活動の貴重な財源となりました。農家の多い地域のためトラックが何台も集まり，効率よく進められました。
・運動会は，悪天候のため前日準備ができず，当日の朝早くの会場準備となりました。テントや万国旗等，短時間で準備できたのは「おやじの会」の力でした。
・稲作学習では，草刈りや田植え指導でお世話になりました。ＪＡの方や役員さんたちの御協力で，児童は泥んこになりながらも楽しく田植えができました。
・りんご学習では，人工授粉や摘果作業をさせていただきました。地域産業の中心となるりんごについての学習は，児童にとってよい経験となりました。
・ねぷた学習では絵師さんに教わりながら，墨描きから色付けまで児童が製作しました。３年ぶりの弘前ねぷた合同運行にも参加でき，大いに盛り上がりました。
・後援会，学校運営協議会，笑顔づくり委員会では，児童の教育活動費として支援していただいたり，安全面やいじめ・不登校などの生徒指導に関する問題等について検討したり，助言をいただいたりしました。

このように，本校は地域や保護者の大きな力に支えられています。児童がよりよく成長するためには，学校職員はもちろんのこと，地域の協力は不可欠です。最初は知らなかった人を覚え，何をどう進めたらよいかも少しずつ分かってきました。今のよい関係を持続させられるように連絡を密にとり，感謝の気持ちを忘れず，地域に根ざした学校を目指していきます。

雑感

弘前地区小支部・小沢小
佐　藤　貴　史

わたしが小学校６年生だった時，通っていた学校には，野球，ミニバスケットボール，陸上，卓球，水泳，合奏及び合唱と７つの部活動があり，大会やコンクールに向けて活発に活動していました。わたしは水泳部に所属しており，平日はもちろんのこと，土曜日も午前で授業が終わると，教室で友達とにぎやかにお弁当を食べ，プールへと向かった記憶があります。

わたしが小学校教諭となり５年ほど経った頃から，弘前市内でも部活動からスポーツ少年団に移行するチームがポツポツと増え始めました。さらに数年後には，少子化によって単独での活動が困難になり，近隣校と合同チームを組織する学校も出てきました。これらの流れはここ数年でどんどん加速しており，県の調査によると，県内小学校における運動部活動数は，令和元年度が476チームだったのに対し，令和３年度には94チームに激減しています。

また，スポーツ庁と文化庁の有識者会議は，それぞれ令和７年度末までに公立中学校の休日の部活動を地域移行する改革を提言しており，将来的には小学校のみならず，中学校においても部活動がなくなっていくものと思われます。

わたし自身は「体育」でというよりは「部活動」で，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成してもらったと感じていますし，年の離れたＯＢ・ＯＧを含む異年齢との交流の中で，コミュニケーション能力の基礎を作ってもらったと思っています。部活動には感謝しきりです。

では，わたしが部活動を通して学んだことを，今の子供たちには何を通して学んでもらえばよいのでしょうか。学校ができることとしては，やはり日々の授業であり，学校行事や児童会活動等を通してということになるのでしょう。そしてさらに，学校と地域が相互にパートナーとして連携・協働して行う地域学校協働活動を通して，より実践的に学んでいければよいなあと考えています。そのためにも，弘前地区小学校教頭会で取り組んでいるコミュニティ・スクールに関する研究を深めていきたいと思っているところです。

たくさんの感謝

弘前中支部・石川中
前　田　達　哉

石川中学校に赴任することが決まった３月下旬，「石川地区は，保護者や地域の方がとても協力的で，小学校と一緒の行事も多いですよ。」と周囲の方から言われました。大鰐町出身の自分にとって石川地区は学生時代，弘南鉄道で毎日通った沿線であり，地元同様に身近に感じる地区でもあります。そこへ教頭という初めての立場と５年ぶりに学校現場へ赴任するということで，前任の教頭先生から引き継いだメモを何度も読み返し，季節外れの雪が降る４月１日の朝，緊張感とわくわく感を交錯させながら学校に向かったことを覚えています。いざ新年度がスタートしてみると，提出する文書の確認，ＰＴＡとの連絡，地域の協議会の事務局…と次々と机に降り積もる書類に埋もれる毎日が続きました。そのような自分に，校長先生をはじめ周りの先生方，地域の方々は常に優しく，丁寧にアドバイス，サポートをしていただき，おかげで何とか１学期を乗り切ることができたことにとても感謝しています。

さて，本校のある石川地区は津軽平野の最南端に位置し，平川を挟んで水田が開け，山手にはりんご園が広がる農村地域にありながら，東北自動車道，国道７号線，ＪＲ奥羽本線，弘南鉄道が通る交通の要衝でもあり，大仏ヶ鼻城跡などの歴史的な史跡も多くあります。さらに一地区，一小学校，一中学校という環境が整っていることで，地域の連携，絆も強く，伝統ある地域でもあります。令和６年度には弘前初の併設型小・中学校がスタートすることになっており，２学期から現校舎の一部解体が始まります。ここ最近はそのことを聞いてか，地域の方々が学校に訪れては新校舎のことを尋ねたり，自身の中学校時代の思い出を話してくれたりすることが多くなり，あらためて地域の方々の学校に対する愛情・関心・期待の高さを感じています。伝統ある石川地区の学校教育が変わるという歴史的な場面に教頭という立場で関わる機会を与えていただいたことに重い責任を感じながらも感謝しています。地域の方々の期待に応えられるように新しく始まる学校づくりの第一歩を小・中の職員，そして地域の方々と共に進めていきたいと思います。

支えられていることに感謝して

弘前中支部・弘前第五中
成　田　茂　樹

赴任校の職員室に入ると，今まで一緒に勤務したことのある先生方が多く，和やかに挨拶をしながら，緊張が少し和らいだ状態で職員室正面の座席に座りました。前教頭からきめ細やかな引き継ぎを受け，その詳しい資料を見ながら業務を進めながらも，それでも仕事がイメージできず不安な思いで４月を過ごしました。４月はひたすら書類と格闘し，トンネルの中を走っているようでした。今日はまずこれをやろうと考えていたことが，夕方になってもほとんど進んでいないこともよくありました。特に「ＰＴＡ総会」「部活動後援会総会」「学校運営協議会」等の学校から発信する内容は失敗もたくさんありました。それでも，先生方やＰＴＡ役員の皆さんの協力があってなんとか乗り切ることができました。（乗り切れていなかったとの噂もありますが…。）自分自身がよく分かっていない中で質問され，逆に質問することでイメージを掴みました。５月の大型連休の直前に職員朝会で「皆さん，４月が終わります。お疲れ様でした。」というセリフを言ったとき，先生方から笑いが起こりました。私は先生方に言ったつもりでしたが，実感がこもっていて，教頭である私自身に言ったように聞こえたようです。

教頭職は学校環境整備も職務になります。電線に校地内の立木の枝が触っているなど，技能主事さんでも手にあまる内容は学校整備課に連絡します。その対応の速さにも驚き，学校が校外の方々に多分に支えられていることも実感しました。教頭として，先生方を支えることができればいいのですが，まだまだ助けられている状態です。

学級担任のときには，大切だと思うことを伝え，その上で生徒がやりたいことを全部やらせてあげたいと気を配っていました。教頭として，まだまだそんな余裕はありませんが，一緒に良い学校を作り上げるという目標に向かって，先生方に気持ちよく毎日を過ごして，ベストを尽くしてもらえるように気を配りたいと思います。

出会いに感謝して

八戸小支部・新井田小
豊　巻　裕　史

本校は，今年で創立146周年となる，八戸市内でも長い歴史をもつ学校です。八戸市の中心部より南東側に位置し，新井田城のあった高台に位置しています。高台にあるため，子供たちは「がんばり坂」「なかよし坂」「かんがえる坂」と名付けている３つの坂を上がって登校しています。新任式の時に代表児童が紹介してくれたように４階からの眺めがよく，遠くは八戸大橋のある海の方まで見え，夜になると中心部の方向にきれいな夜景が見えます。

引継ぎのため，本校に来た時は，校舎の古さに目がいったのですが，新学期が始まると，教室には先生とともに元気に活動する子供たちの姿がありました。学校を離れていた自分にとっては，何よりも嬉しいことでした。

赴任してまもなく，新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，バザーの中止が決まりました。多くの準備を要するため，春の時期に決定をしなければならないわけですが，ＰＴＡの方々の残念そうな表情を見て，自分も同じ思いになりました。子供たちのため，新井田小学校のＰＴＡの方々とともに，そのエネルギーを感じながら，行事を行いたかったと思いました。今は，ＰＴＡや教職員の方々と協力してバザーなどの行事ができる時を心待ちにしています。

春から教頭の立場で新しい業務に向き合うことになり，学級数が多いことから新型コロナウイルス感染症拡大に対しても，どのように教育活動を進めていけばよいか，日々頭を悩ませる毎日です。悩めば悩むほど教頭として力を付けなければという思いになります。

そんな中でも，私が恵まれたと感じているのは新井田小学校に来てからの出会いです。頼りになる教職員の方々や熱心なＰＴＡの方々，地域の方々に支えられながら，教頭の業務に取り組ませていただいております。

今の私は，教頭としてまだまだ未熟ですが，教職員，ＰＴＡの方々や地域の方々と協力して，新井田小学校の子供たちの成長のため，そして地域のために貢献できるように努力していきたいと思っています。

種差の人と自然に支えられ

八戸小支部・種差小
山　口　将　貴

本校は，平成25年に三陸復興国立公園に指定された種差海岸の天然芝生地から歩いて５分のところに位置し，校舎からは雄大な太平洋が見渡せる。保護者や地域の教育に対する関心が高く，在籍児童のいない家庭もＰＴＡ特別会員として教育活動やＰＴＡ活動に支援していただいている。現在児童数19名，完全複式学級となっている。

４月１日の勤務初日。前日まで前任校の後片付けに追われ，十分な気持ちの整理もつかないままの出勤となった。玄関の扉を開けようとすると，「おはようございます。」と，元気な挨拶の声が聞こえてきた。周りを見たが子供の姿はない。すると，「おはようございます。」と，今度は数人の子供たちの挨拶が聞こえてきた。声のする方を見ると，校庭のずっと端の方から，私に向かって挨拶をしてくれた子供たちが見えた。顔が確認できないくらい遠い距離から，新しく来た先生だと思い，挨拶で迎えてくれたのである。こんな素直な子供たちが育っているこの学校，この地域が一瞬で大好きになった。

その後，４か月が経過したが，少人数ならではのよさがたくさん見えてきた。運動会では，保護者が用具や決勝の係をやってくださり，みんなで行事を成功させたという達成感があった。テントやテーブルの片付けも，お母さんたちだけで全てやってしまったのには驚いた。また，地域の方々が休日に校庭の草刈りや花壇の整備をしてくださることもあった。私からお願いしていたわけではないのに，常に学校のことを気にかけ，自主的に支援してくださっている。

自然環境にも恵まれており，種差海岸や海に関わる体験学習も盛んである。７月には，種差漁業生産部会の御協力により，ウニの殻むき体験に参加させていただいた。給食で新鮮なウニ丼を食べることができ，心からこの学校に来てよかったと思った。

これまで，自分の仕事をこなしていくのに精一杯で，先生方や保護者，地域の方々に支えられ何とか日々を過ごしている。これからはこのような特色がたくさんある種差小の教育活動がさらに活性化できるよう，教頭としての自覚をもって取り組んでいきたい。

感謝

八戸中支部・市川中
佐　藤　　功

本校のある八戸市市川町は八戸市の最北部にあり，西は五戸町，北はおいらせ町と接します。多賀台小，多賀小，轟木小，桔梗野小の地域性の違う４つの小学校区があり，南北に東北新幹線・青い森鉄道・国道４５号線・みちのく有料道路，東西に五戸川が流れます。陸上自衛隊基地，プライフーズスタジアム，桔梗野工業団地，市川漁港，田畑，牧場など様相の異なる様々な姿をもつ市川町のほぼ中心に本校はあります。

本校に教頭として赴任して約半年になりますが，日々の業務に忙殺され，生徒には振り返りをしなさいと指導している割には自分のことを振り返る余裕はありませんでした。この半年間を振り返ってみると，様々な方々からの御支援があったからこそ，何とかやってこられたと感じています。生徒・保護者・教職員の皆さんはもちろん，青少協や地学連協の方々，同窓会や親父の会の方々など，様々な場面で地域の方々に支えられていたことに改めて気付かされました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により，学校行事や地域行事が思ったように行えない中でも，「いつでも協力するよ。声をかけてね。」という声に勇気づけられました。とても感謝しています。

生徒の頑張りにも勇気づけられています。今年度は市中体連夏季大会で，女子テニス部，サッカー部が団体優勝し，サッカー部は県大会でも２位になり東北大会への出場を果たしました。また，陸上の走高跳でも東北大会出場者がいました。野球部は市春季大会で優勝し，県大会でも準優勝となり，水戸市長旗東日本大会への出場権を獲得，本大会でも３位入賞を果たしました。

しかし，ただ勇気づけられ，感謝しているばかりではいられません。僅かではあると思いますが，生徒，保護者，教職員，地域の皆様の役に立てるように，自分にできることを一つずつ確実に，誠実に行いながら，これからの教頭としての職務に当たっていこうと，決意を新たにしているところです。

島守中へ赴任して

八戸中支部・島守中
須　藤　修　生

本校は，新井田川上流部の南郷区島守地区にあります。島守地区は，新井田川の周囲を山々に囲まれた盆地のような地形で，自然豊かで風光明媚な地域です。主産業は，農業で，生徒の家族も何かしら農業に携わっています。八戸市中心街から離れていることもあり，地域の人口は年々減少傾向にある地域で，現在，全校生徒21名という小規模校となっています。生徒もこの状況を危惧しており，総合的な学習の時間などにおいて，地域活性化をテーマに，様々な課題に取り組んでいます。春には，浅田山（通称：虚空蔵山）にある龍興山神社の清掃活動を創立以来70年継続して行っています。夏には，生徒が企画した，学校の目の前を流れる新井田川を手作りイカダで下る行事を，地域の方々に協力していただきながら実施しており，今年で３年目を迎えました。年間を通し，「スマ中ファーム」（学校農園）で様々な野菜を栽培し，生産から販売まで農園の維持経営に関する学びについても全校で取り組んでいます。全てにおいて，保護者や地域の方々に協力・支援をいただき，小規模校ならではの，地域に根ざした学校づくりに全職員が一丸となって取り組んでいます。コロナ禍といえども，行動制限が緩和されつつある現在，これまでどおりの教育課程ではなく，伝統を継承しつつ，新たなステップに挑戦していくことが大切だと感じています。まずはこの一年，本校の特色，地域との関わり，学校課題について深く理解し，校長の指導のもと明確な課題設定を行い，次年度，全職員と共に取り組んでいきたいと考えているところです。正直，教頭として当然未熟であり，校長，職員，周囲の方々からの協力，支えにより業務を遂行している状況であります。できるだけ早く独り立ちできるよう日々精進し，校長が目指す学校作りに貢献できるよう励んでいきたいと思います。

チーム蟹田の一員として

東郡支部・蟹田小
花　田　一　仁

本校の学区，蟹田・平舘地区は，津軽半島東岸部のやや中央部に位置し，東は陸奥湾，西は中山山脈をもって北津軽郡，南は蓬田村，北は今別町にそれぞれ接し，東西12ｋｍ，南北25ｋｍの海と山の町にあります。本校は全校児童101名。通常学級６学級に特別支援学級２学級の８学級で編成されており，今年は統合40周年記念を迎える学校となっています。子どもたちは素直で優しく，教職員は若い先生が多いこともあり，皆フットワークが軽く，チームワークがとても良い学校です。

私は６年間の行政勤務を経て，この４月に本校に赴任しました。その間ＩＣＴ教育の急速な普及や新型コロナウィルス感染症の感染拡大による影響等，学校を取り巻く環境も大きく変わっていました。それに加え７年ぶりの学校での勤務，初めての教頭職と赴任直前まで私は不安な気持ちでいっぱいでした。しかし，赴任早々，町教委の方々や校長，周りの先生方などたくさんの方々に温かく迎えられ，その後も業務についてのアドバイスやフォローをたくさんしていただき，一気に不安は解消されました。また，子どもたちと一緒に学校生活を過ごすことも久しぶりで，毎日元気な子どもたちからパワーをもらい，忙しいながらも充実した日々を送らせてもらっています。

教頭として半年ほど経ちますが，正直，校長や教務，先生方の助けがあったからこそ，ここまで何とかやってこれた気がします。まだまだ未熟ですが，これからはチーム蟹田の一員として，また，教頭として子どもたち一人一人の成長を大切にしながら，教職員が教育活動に専念できるための環境作りや，学校と家庭・地域のつなぎ役となるよう微力ながら精一杯取り組んでいきたいと考えています。

職員室のゴールキーパーに

東郡支部・蓬田中
中　津　大　輔

運動会，そして文化祭という中学校の二大行事を終え，ようやく本稿を執筆しようという心持ちになった。４年前に教務主任を命じられた際，当時の校長に「書類に埋もれる日々へようこそ」と冗談めかして言われたが，一か月してその言葉が冗談ではなかったことを思い知らされた。教頭になり，その状況に拍車がかかったように感じるのは気のせいだろうか。

学校を職場としながら，生徒との主なやりとりは週数時間の授業だけ。後はせいぜい玄関や廊下でたまたま出会った際に挨拶を交わす程度。混沌とした教室で生徒とのやりとりを積み重ねながら一人一人の成長を見守る学級の指導も，生徒がアイデアを出し合い，イメージを具体的な形にしていく過程を支える生徒会活動の指導も，一緒に汗をかきボールを追いながらチームづくりに苦闘した部活動の指導も，すべて手から離れてしまった。教師を志したときに思い描いていたものとはまったく違う日々を送る中で，「こんなはずでは･･･」という思いがよぎる。

しかし，「学校の先生らしい日々」を存分に味わえたのは，当時の校長，教頭のような管理職をはじめ，多くの先生方の支えがあったからだとしみじみ感じるようにもなった。学校というチームには，最前線で得点を狙うフォワードも，ハードワークで攻守のいずれにも携わるハーフも，相手の攻撃を硬軟交えながら受け止めるディフェンダーも，常にチーム全体のバランスを指揮するゴールキーパーも必要である。後ろを気にせずゴールを狙い，おいしい思いだけをさせてもらえた20代。そこから経験を重ね守りもできるようになり，とうとうチームの後方で，バランスを保つ役割が自分にも回ってきたということなのだろう。その役割を全うすることが，チームの一員としての私の存在意義なのだと，ようやく受け入れる気持ちになってきた。

職員一人一人が持ち味を発揮し，生き生きと指導や職務に当たることができれば，かけたエネルギーに応じて生徒の力も伸び，目指す学校に近づくに違いない。職員室の皆がやりがいを感じながら職務に専念できるよう，教頭として職員の後方支援に力を尽くしたい。

激動の半年間

西北支部・中里小
加　藤　　誠

本会報の原稿執筆に当たり，今までの半年間を振り返ってみると，新任教頭として赴任した４月の記憶がほとんどない。自身のスケジュール帳を見返してみると，４月は，まさに迷走・放心状態であった。自分が書いた字でも読めないものもある。記憶にあるのは，’この仕事は誰が担当するのか’理解していなかったり，過去の資料やデータを見付けることができなかったりして，提出書類やメールの締切日を過ぎてしまい，頭を下げて提出したことが何度もあったことである。

４月，県総合学校教育センターから，中泊町立中里小学校に赴任となった。心機一転，心躍らせて５年ぶりの学校現場である。ところが，５年前の学校現場と重ねてみると，変わってしまったことが多くあった。運動会等の行事の縮小や中止，新型コロナウイルス感染症拡大防止に係る様々な行動制限。ＰＴＡ活動や保護者との交流（懇親会を含む）の縮小。節目に職場の教職員と労をねぎらう懇親会の中止。管理職の仕事に対する自分の力量不足もあり，多忙の中にも不完全燃焼な思いで過ごしてきたような半年間であった。

４月からの半年間，子供たちの校外学習に引率する機会が何度かあり，自分で勝手に「ふるさと研修」として，中泊町の魅力を発見することができた。中泊町上水道管理センター，排水処理施設，小泊漁港（釣り体験，小泊漁協荷捌き施設見学），小泊ダム，宮越家離れ・庭園，金太豆蔵劇場，中泊町博物館，芦野頭首工，若宮機場……。自然豊かな中泊町の山，川，海の恵みや町の文化・歴史を感じ，そこで働く人々の思いや努力を大いに感じることができた。こうした町の魅力発見だけでなく，日々，子供たちと一緒に授業することや，温かい教職員に支えられていることで，学校現場に戻ってきたという思いが徐々に強くなってきた半年間であった。

通勤時に通る’こめマイロード’は，原稿執筆の時は，稲刈りが終わった時期で，これから冬の地吹雪の時期へと突入する。この会報を読んでいる頃は，きっと，春が来るのが待ち遠しくなっていると思う。教頭２年目の春もまた待ち遠しい。

教育目標の実現に向けて

西北支部・板柳中
尾　崎　徳　哉

板柳町立板柳中学校は，現在10学級で297名の生徒が在籍している。本校の教育目標は，「無限の可能性に挑戦する生徒」である。赴任した１年目の私が，目標を達成するための手立ての一つとして重視しているのが，キャリア教育及び総合的な学習の時間の充実である。

これまでの私は，担当教科の指導における資質・能力の育成を重視してきた。それは現在も変わらないが，学習指導要領の改訂を受け，キャリア教育や総合的な学習の時間の重要性を，より一層意識するようになった。きっかけは，以前の職場に勤務していた際，秋田県大館市の小・中学校を訪問したことによる。大館市では，人口減少や県外への人材流出を食い止めるため，総合的な学習の時間を中心とした「ふるさと・キャリア教育」の充実に取り組んでいた。そのような取組の中，学力の向上においても成果を挙げていた。

私はその訪問を通して，子供たちに将来にわたって，汎用的に活用できる力を身に付けさせるためには，各教科による学びは言うまでもなく，それとともに，自分の将来を見据え，主体的に学習する態度を育成するキャリア教育や総合的な学習の時間における探究的な活動の充実を図ることの大切さを改めて認識した。

今年度，板柳中学校では，キャリア教育の一環として，高校生や職業人による講演及びパネルディスカッション（町教委主催），板柳町出身のオリンピアンである福士加代子さんによる講演会，未来デザイン県民会議「こんにちは知事です」による青森県知事，三村申吾氏との対話などを実施してきた。このような取組を通して，子供たちが自分の将来を見据え，自分に必要な資質・能力は何か，どんな自分になりたいのかを考えさせる機会を設け，キャリア教育の充実を図ってきた。

今後は一層の教育効果を高められるよう，小学校との連携を図ったり，地域の人材を活用したりしながら，組織的・計画的な教育活動を展開し，教育目標である「無限の可能性に挑戦する生徒」の実現を目指したいと考えている。

なすべきことを見失わずに

南地方支部・田舎館小
渋　谷　恭　司

本校は，平成23年４月に，旧田舎館小学校，旧西小学校，旧光田寺小学校の３校統合により創立した。学区は，田舎館村全村。全校児童の９割が，スクールバス通学をしている。創立から10余年が過ぎ，旧３校の色合いも一つに融合し，村唯一の小学校という意識が醸成され，保護者も大変協力的である。

新しい教頭として赴任した４月は，目が回る忙しさだった。次々と状況判断を求められる初めての教頭職で，求められる仕事を必死でこなしていた。意図をもって行動しているとは，とても言い難い状況だった。

そんなある日，廊下で数名の６年生から声をかけられた。「ひょっとして教頭先生ですか？」の言葉に，ハッとした。コロナ禍で，新任式を放送で行った結果だが，その後，新米教頭はそんな校内巡視しかできていなかったのだと反省させられた。同時に，教頭として認知すらされていない状況に，変な緊張感もほぐれた。

それからは，校内を回りながら自分らしくあいさつや会話をして，子どもたちや職員との関係づくりに努めている。幸せなことに，校長先生は，新米教頭を気遣い様々な御助言をくださるので，至らない部分を何とか埋めている毎日である。そんな校長先生の日々のお話から，私は，村に唯一の小学校の教育で大切なことを学んだ。本校で学んでいる全児童が，将来の村を支える大切な人材なのである。誰かが医師になり，誰かが農業に就き，別の誰かが役場職員になり･･･，村を構成する様々な業種に就いている卒業生から世代交代が繰り返され，田舎館村が存続していくのである。教頭として，子どもたちの成長を長い目で見守る視点と，この田舎館小学校の教育で大切にすべきことが見えた気がした。

「忙中閑あり」，「教育に夢を」，「洞察力を磨いて」，これまでも諸先輩先生方からいただいた言葉を心に刻んで仕事に取り組んできたが，今度は教頭として，頼もしいチーム田舎館小の教職員や保護者，地域の方々と共に，将来の田舎館村を支える大切な人材を育てることに全力で取り組んでいるところである。

健康第一・笑顔が一番

南地方支部・明徳中
藤　田　　丞

左手に岩木山を仰ぎ，７号線を直進，藤崎町を超えてＹ字路を右へと入る。旧道感のある少し曲がって細い道を進み，程なくして右折。踏切を越えると，歴史ある校門，そして築年数の割には美しい明徳中学校の校舎が見える。毎朝の光景である。

－４月。前任校勤務５年の後，教頭職として明徳中学校勤務が始まった。

慣れない職員室のポジション，気恥ずかしい呼称，日々机上に上がる膨大な数の文書や調査，起案書類，ファイルの山，そしてどんどんなくなるボールペンのリフィルと「はん蔵」の朱肉。ひとつ終わる前に次々やってくる仕事に，「自分に務まるのだろうか」と毎日思っていた。（今も思っているが。）

そんな中，前に進んでいけるのは，学校長をはじめ，先生方，スタッフ，町教委の皆様からの温かい指導，助言，サポート，フォローのおかげである。大変有り難いことだ。日々成功や失敗から多くの事を学びながら，なんとか頑張れている。

それでも時々，「自分の仕事は，子ども達のためになっているのだろうか？」という疑問が浮かぶ。管理職の立場として，そして先生方のリーダーとして働くことが，保護者にとっては通わせたい，子ども達にとっては通いたい，と思う学校づくりにつながっていくと信じて邁進しているつもりだが，それを実感するのは思いのほか難しいのかもしれない。

さて，１学期が終わり，この２学期は行事が目白押しである。コロナ禍もなかなか収まらず，調整が難しいところではあるが，スタッフ，地域の皆さんと協力しながら，子ども達の学び，成長の場面を確保していきたい。

明徳中学校の教育目標は「健康第一，笑顔が一番」，「夢に向かって，互いに思いやり，明るく元気に」である。目指す生徒像ではあるが，まずは自分が日々の目標として掲げ，職務に努めていく所存である。

人との関わり合いの中で

上北支部・十和田東小
須　郷　英　明

「行ってきます！」と妻に声をかけ，塗装したての淡いベージュに輝く校舎へ向かうこと徒歩２分。十和田市から三沢市へ向かう県道10号線沿いに本校がある。その県道沿いに流れる稲生川を越えれば，数か所の保育園。さらには，本校の正面にある交差点から東北町へと北上する県道を挟んだすぐ向かいには青森県立十和田工業高等学校。徒歩で５分ほど三沢市側へ向かえば十和田・六戸学校給食センター，一本木沢ビオトープ，十和田東中学校，北里大学獣医学部がある。これらの施設等の間には，現在も宅地へ造成中の箇所を含め，住宅街が広がっている。本校は今年度72周年を迎え全校児童数は383名，ほぼ横這いで推移している。

否が応でも力が入る。「こんなに恵まれた環境で教育活動を展開できることは，この上なく幸せなことだけど，新米教頭の自分には何ができるのだろうか？」しかし着任早々，増尾校長からの一言で私の心は決まった。

「人との関わり合いの中で喜びに満ちた教育の推進」

本校のように校種も分野も異なる学校や大学，施設と連携できる小学校は，県内を見渡してもその数は少ないだろう。

コロナ禍による交流活動の自粛を経て，今年度からは給食センター栄養教諭等による食育指導，北里大学と連携したビオトープ探検，ものづくり体験学習での工業高校生徒との交流・・・。学校だけでは決して経験できない学びの場を次々と創造していく本校の教職員。そして，交流する相手方との関わり合いはもちろんのこと，日頃から活動を共にしている友達との新たな関わり合いから，仲間づくりにますます拍車がかかる子供たち。

当の私は，関係各所との電話でのやり取りや文書等の確認だけで大わらわ。それでも，本校の教職員は近隣校や施設と連携した学習活動を次々と実現させつつ，常に笑顔で教育活動に当たっていることに教頭として平身低頭の思い。

本校教職員をはじめ多くの方々との関わり合いに胸をはずませながら，今朝も喜びに満ちた声で「行ってきます！」

安心感

上北支部・県立三本木高附属中
二ツ森　孝　史

県立三本木高校は私の母校であります。縁あって本校に勤務できたことを大変うれしく，そして幸せに思っています。

本校は，県内唯一の県立中学校として，平成19年４月に開校した併設型中高一貫校です。例年20校以上の小学校から入学しており，全校生徒240名が「文武両道」を合い言葉に日々全力で勉学や部活動等に励んでいます。

中でも，他校でもなかなか経験できない活動もあり，赴任したばかりの私にとっては，とても興味深いものもあります。例えば，「森林環境学習」。奥入瀬渓流そばの国有林をお借りして「三本木夢と生命（いのち）の森」と命名し，卒業生や保護者，教職員が植林した約10,000本のブナの観察をはじめとする植物や小動物及び生態系の観察を行っています。また，「オンライン海外研修」では，ビデオ通話を使って，英会話学習やバーチャルスタディーツアー，フィリピンの地元高校生との国際交流等を行っています。改めて，学校は楽しいところだと実感しています。

タイトルの「安心感」は，４月最初の職員会議で，先生方に話したことです。生徒が「安心」して登校する，保護者や地域の方が「安心」する学校である，同僚や家族が「安心」して仕事に励む，等が挙げられます。様々な相手に「安心感」を与えると，最後は，「自分」が安心できるという内容です。

これまで，私は，元気に挨拶し，集中して授業に取り組む生徒達から「安心感」をもらいました。文化祭や運動会，修学旅行などの行事では，「さすが，附中生！」と言われるような活躍に感動しました。また，生徒達に対し，しっかりと寄り添う本校の先生方から「安心感」を覚えました。そして，保護者・地域の方々は，教育に関心を寄せる方も多いため，大変心強く「安心」できます。残すは，私自身が「安心」される教頭にならなければ…と。

これからも，「謙虚」な気持ちと「感謝」の気持ちを忘れずに，いつも「笑顔」で，日々職務に邁進したいと思います。

つながることの大切さ

下北支部・正津川小
皆　川　洋　介

今までにない緊張感と不安を抱えての赴任となった４月。前任の教頭先生に細かな引継ぎをしていただき，また，校長先生や親切な先生方に支えていただいたおかげで，慣れない職務に右往左往しながらも，何とかここまで乗り切ることができました。

本校は，児童数12名，完全複式４学級の小規模校のため，日々，児童一人一人に関わることができるというメリットがあります。複式指導を実施している本校では，カリキュラムの工夫や職員の連携が必要不可欠なため，全教職員で児童に関わり，つながることで実態をより把握し，課題を見出すことができると感じています。また，それぞれの教職員の置かれている状況を理解し，働きやすい環境づくりをすることも教頭としての大切な職務です。職員室での会話や相談を通してつながることで，今，重点的に力を注ぐべきことが見えてきます。

本校の校舎は，地元大畑のヒバ材がふんだんに使われ，木材の温もりに包まれています。築32年目を迎えた校舎ですが，毎年夏休みには，ＰＴＡで協力して教室や廊下の床磨きやワックス掛けを行ってきたことで，今でも床がピカピカに保たれています。保護者の皆様や地域に愛され続けている学校であることを痛感しました。また，古くから行われている地域の祭りに参加したことで，地域と学校とのつながりや，地域のことについて聞くことができました。学校運営協議会等，地域の方とつながることで保護者や地域の思いや願いを知り，私にできることを誠実に努めていこうと気持ちを新たにしました。

学校を取り巻く様々な人，物，事とつながりを強め，相互理解を図りながら教育活動を進めることが望ましい人づくりをする土台となると考えます。

コロナ禍の影響により，制限されてきたことで希薄になったつながりを能動的に再構築し，校長が学校経営の重点に掲げる「少人数を活かした学校経営」「地域連携・協働を活かした学校経営」を実践できるよう，努めていきたいと思います。

教頭としての一歩

下北支部・佐井中
伊　藤　　輝

大規模校で教務主任を務め，次年度に向けて準備を進めていた矢先，佐井中学校への赴任が言い渡されました。佐井村は若いころ勤務していたこともあり，様子は何となくわかっているつもりでした。しかし，３月末に単身赴任生活を始めると，風速10mを超える風が日常的に吹きすさび，次から次へと押し寄せるワラジムシやゲジゲジ等の大群の様子が，まるでこれからの教頭生活を暗示しているようで不安が募りました。

４月からのスタート。教頭先生と言われても自分のことだと気づかなかったり，物事を聞かれても明確に答えることができず迷惑をかけてしまったりしたこともありました。多岐にわたる業務内容に，この職を経験された諸先輩方は，どのようにやり遂げてきたのかと，毎日考えさせられました。しかし，校長が一昨年まで同じ職場で勤務していたこともあり，とても心強く支えてくださいました。また，村長が元同僚であったり，役場に教え子がいたり，保護者が同級生だったり，ＰＴＡ会長がかつて出場した県民駅伝のチームメイトだったりと，人と人とのつながりの大切さをこれほどまでに実感させられたのは初めてでした。保護者や地域，関係機関，家庭と連携を進めていくうえで，恵まれた環境でスタートできたことに感謝しています。

新型コロナウイルスの影響で体育祭は延期になったものの，その他の学校行事や授業は順調に進めることができました。しかし６月，今度はぎっくり腰に見舞われました。前任校では毎日２万歩を超えていた万歩計が１万歩にさえ届かない時も多く，運動不足の面は否めなかったと思います。しかし，今では小規模校でありながら，運動面でも文化面でも県大会出場を次々に決めていく，そんな生徒と一緒に学校生活を過ごすことで，刺激とエネルギーをもらっています。

本校の生徒は卒業後，親元を離れて生活する生徒も多く進路選択は様々です。今年度も教育活動には様々な制限・制約がありますが，自分の力で生活できる人材の育成という旗印のもと，微力ながら生徒に力をつけさせるべく，尽力していきたいと考えています。

人とつながり，できることを全力で

三戸支部・剣吉小
小田島　　諭

本校は北信愛の居城，大館城跡の高台にあり，眼下には馬淵川や青い森鉄道，国道104号線と国道４号線が交差しています。正面に名久井岳を望み立地環境に恵まれています。

本校への異動を命じられた時，教頭職１年目から閉校事業に直面し，私に務まるのか不安な気持ちでした。しかし，「できることをやって，失敗したらすぐ謝る。そして，すぐやり直す。」と指導を受け，積極的に人を覚え，チャレンジあるのみと言い聞かせ取り組みました。業務は多岐にわたり重責を感じながら励んでいます。

今年度，本校は閉校記念事業を展開しています。優しさ日本一を目指す素直な児童，児童に寄り添い故郷を愛する心を育む職員，意欲的な町内会長さんやＰＴＡ役員を中心とした実行委員の皆さんと共に各事業を遂行しています。中でも，運動会の来校者全員でのドローンによる空撮に集まった人々の多さ，記念誌制作で和気あいあいと活動する姿，実行委員会での積極的な意見交換，どれをとっても学校への深い愛情を感じさせられるものでした。記念誌制作のために過去の資料を拝察すると，児童の交通安全や環境教育のための組織が整備され，積極的な実践がなされています。また，偉大な先輩を多方面に数多く輩出している地域です。脈々と受け継がれた伝統と恵まれた教育環境にある本校に勤務できることは，幸せなことです。

職員や地域の人々に積極的に関わり，関係を深め，共に難題を克服しながら進んできました。失敗・謝罪・再挑戦の繰り返しでしたが，信頼関係は深まり，いつしか私自身にも学校への深い愛着が湧いていました。

誠意をもって職務に当たることで皆さんの笑顔や思いに触れることができ，それが私の達成感となって活力となっています。これからも，児童のために，職員のために，地域のために，自分にできることを精一杯取り組んでいきたいと思います。

伝統を受け継いで

三戸支部・赤保内小
相　馬　直　恵

階上町は三陸復興公園「臥牛山」のふもとにある太平洋に面して，県内で最も早く日がのぼる町です。その中心部にある本校は，階上町西部の旧登切小学校，旧金山沢小学校の統合により広範囲にわたる学区から，208名の児童が「夢の実現に向かう子」を目指して毎日元気に過ごしています。

私は９年前に教諭として，そして，今回は教頭として２度目の赴任となりました。児童数は，100名ほど減少しましたが，校舎に掲げられている
「　　私も輝いて　　あなた輝く　　」
の合言葉に向かって，学校行事等に意欲的に取り組む児童は健在でした。また，「管理職になって戻ってきてください。」と送り出してくださった当時お世話になった地域の皆様からは，「お帰りなさい。待っていましたよ。」と温かい声をかけていただいたことで，４月不安でいっぱいだった心がほっこりしたことをはっきり覚えています。

本校は，県の特別活動教育研究大会の発表に向けて特別活動の実践研究に取り組んでいます。特別活動の特質は「為すことによって学ぶ」です。交流活動や集会活動，コミュニケーションが厳しく制限される中，工夫を凝らして，児童に楽しく潤いのある学校生活を送らせるために，日々一歩踏み出そうと全職員で共通実践を重ねています。

私は，校歌にある『父母ここに　築きたる　町のほまれを　ひきつぎて　まもるまなびや　赤保内』この歌詞を大変気に入っています。先人の教えや校風を敬愛し，大切に守り続けていこうという強い意志と，母校愛の大切さが込められています。この校歌を，子どもたち・地域の方と共に大切に歌い継いでいこうと思っています。

このようなすばらしい学校で教頭を務めることに大きな責任を感じています。次の世代に渡していけるように，日々精進し，赤保内小学校の伝統を大切に守っていこうと思っています。

令和４年度
第64回全国公立学校教頭会研究大会 岩手大会（オンライン開催）の報告

弘前地区小支部・相馬小　**桶　田　義　和**

【１日目　記念講演】
演題：「アドリブ力を高める」
講師：大友　啓史（おおともけいし）氏（映画監督）

令和４年度の教頭会全国大会は，岩手県盛岡市を会場に参集型とオンライン型を併用したハイブリッド形式で行われる予定でしたが，７月中旬からのコロナウイルスの全国的な感染拡大により，参集型の一般参加者は全てＺｏｏｍを通してのオンラインによる開催に急遽変更となりました。映画やドラマの制作現場でのエピソードをベースに，組織での突破力やモチベーションの上げ方，想定外の出来事に対する臨機応変な考え方・対応力＝「アドリブ力」について講演されました。

「監督は，それぞれのスタッフの能力を最大限に引き出すのが仕事。監督としては，決め付けることはやってはいけないと気を付けている。監督が作りたいビジョンのために，スタッフ一人一人の能力を引き出すために監督が一番動く。自分のイメージを超えるものを作るために，個々のスタッフに委ねている。制約を付けずにスタッフを自由に泳がす。監督が，答えを出しちゃうとスタッフは忖度して，監督の思いやイメージ以上のものは出てこない。スタッフには，自分がいいと思ったもの，面白いと思ったことをもってきなさい，と言っている。監督として，個々のスタッフの個性や主体性をどう引き出していくかが大事だと考えている。スタッフの個性を引き出すための知恵として，イメージを伝えるときの言葉は，使い古された言葉ではなく，自分オリジナルの言葉で伝えるようにしている。監督として，スタッフにこれまでの発想がちょっと変わるような言葉を伝えて，リフレインじゃないものを作り上げていく。監督として，モチベーションのあり方を間違えずに，自分の意見や考えが無視されない職場の雰囲気を作るようにしている。

監督をしていると，若いスタッフからたくさん刺激をもらうが，こちら側からも刺激を与えないといけない。面白い人でいないと飽きられてしまう。だから，こちらもたくさん仕込まないといけない。今，世界で何が起こっているのか常に勉強し，仕込んで，準備していかないといけない。人の上に立つ人は，面白い人でないとだめ。人間的魅力があって，多少ルールに外れても面白い答えを返してくれる人，ポーンと投げたら，ポーンと返してくれる人，それでいて，押し付けない人，そう言う人が上に立つ人だと思っている。

一人一人の面白さを発見していくには，いかにうまく仕掛けるか，が大事。佐藤健君には，自分の頭で考えることを我慢させた，見ていてあげる，というのもポイントだった。また，その人が欲しいときに，一言言ってあげると変わる瞬間がある。

子供たちと向き合うことは，やりがいもあるけど，本当に大変。社会的に決まりきっていない子供と向き合う仕事は，世界で一番クリエイティブで大変，クリエイティブというのは，本当に悔しい思いもするし，心を痛めることも多いと思うのだけど，子供は怪獣だから，怪獣を退治するのではなく，向き合うように頑張ってほしいと思う。向き合っていくこと全てに愛情が必要。今いる場所にも，一緒に働いている人にも愛情が必要。愛情があれば，間違わない。

映画なんて思いがけない事ばかり起こる。思いがけないことしか起こらない。思いがけないことが起こったときにどう対応していくか，が大事。ポイントを間違えずに，こだわりすぎず，その時のベストを考えていくと，映画の神様が僥倖をもたらしてくれる。こうでなきゃいけないと決め付けたり，こだわりすぎたりして仕事をすると良くない。大事なことを外さないでやっていると，後のことは他の人が埋めてくれる。そこのルールを間違えてしまうと自滅していく。アドリブ力ということがテーマになっているが，アドリブ力というのは，目の前のことにちゃんと向き合えるかどうか，ではないか。映画では，思い通りにいかないことしかない。そこでごまかそうとするのは良くない。真正面から向き合うしかない。思いがけないことも楽しめたりする人の方が豊かな人生になり，実になっていくと思う。」

以上，教育現場でも参考になるのではないか，という大友監督の発言を中心にまとめました。できるだけ監督の言葉をそのままに，若干加除訂正し，再構成しました。楽しく，面白く，そして学びの多い，大変示唆に富む講演でした。

弘前地区小支部・文京小　工　藤　武　久

【２日目　第１Ａ分科会】

課題「教育課程に関する課題」

分科会での提言一人目は静岡市立藁科中学校前田泰則教頭先生。令和４年度から開始される「静岡型小中一貫教育」に向けた取組を，「特色ある学校づくりの取組」と「地域と連携した活動」の２つの視点からまとめたもので，２校の実践事例を挙げて，児童生徒の意識状況の把握や地域の方との会合の実施等における教頭の関わり方についての発表だった。１校目は，地域防災に参加してほしいという地域の願いから，防災の日の設定や地域との会合の設定等を行い，小・中・地域が連携して取り組んだ事例について，２校目は，過疎化が進み地域を愛する人になってほしいという地域の願いから，地域の特産物の販売や地域の良さを知る教育カリキュラムの編成等に取り組んだ事例であった。成果としては，地域の願い，地域ならではの特色ある教育を明確にした取組ができたことや地域人材を活用したり，連合自治会等とも連携を深めたりすることができたこと。課題としては，静岡型小中一貫教育の特色である「軸となる活動」を，中学校区としてどの程度教育課程に反映させるか等，教頭同士が密な情報交換と具体的な関わり方の検討が必要であることだった。

発表後のＺｏｏｍによるブレイクアウトルームでは，連携について，共有する場がもてずに担当者レベルで終わっていることや自治体の支援や地域の方をどのように巻き込むかが課題であることが話題となった。

全体会では，保護者や地域とのつなぎ役としての教頭の役割が重要であることや教育目標，目指す子供像を共有し保護者や地域の方々と一緒に意見を出し合う場の設定がポイントとして挙げられた。

提言二人目は仙台市立七郷小学校関場雅也教頭先生。様々な課題を抱える子供たちの豊かな成長のためには，学校や家庭，地域が一体となって教育を行うことが重要であること。そのために，仙台版コミュニティスクールの導入，推進の必要性を考え，地域とともに歩む学校づくりのために教頭が果たす役割について，コロナ禍における教育課程の改善の視点からアンケート調査を実施し研究した結果の発表だった。成果としては，コロナ禍によって，これまで行ってきた行事等の時間やもち方，さらに働き方についても見直すきっかけになったこと，教頭は教職員，地域，保護者との橋渡しとしての役割が大きく，意識を高くもって学校運営に取り組んでいることが分かったこと。課題としては，地域との交流がコロナ禍で途絶え，再度構築し進めていくことが教頭としての役割として大きく，その解決にはコミュニティスクールの推進が必要であること，地域とともに歩む学校づくりとなるように，教頭はよりアンテナを高くして情報を集め日々提案することが必要であるということだった。

発表後のＺｏｏｍによるブレイクアウトルームでは，学校運営協議会委員の人数や決め方，学校規模によるコロナ禍での取組の違いについて話題になった。

全体会では，地域と学校の文化の再構築に必要なのがコミュニティスクールであること，教職員の転勤に関わらない持続可能を考えると地域コーディネーターを育てることが重要であることが意見として出された。

分科会全体を通して，学校と保護者・地域を結びつける教頭としての役割が重要であり，保護者・地域と学校の交流の場を作ること，互いの意見を共有することが地域協働作業や開かれた教育課程の実現には欠かせないと実感した。

南地方支部・大鰐中　**鳴　海　博　史**

【２日目　第１Ｂ分科会】

課題「教育課程に関する課題」

第１Ｂ分科会では，２つの提言内容・協議の柱で分科会が行われた。

前半は，奈良県奈良市立三笠中学校の濱素晃先生から「世界遺産に囲まれる学校としての取組－地域に誇りをもつ児童であふれる学校づくりを目指して－」という内容で提言が行われた（提言は前任校である奈良市立都跡小学校の実践を基にした内容であった）。校区内に世界遺産が３つある環境の利点を生かし，児童が自分の住む地域に誇りをもつきっかけになるような取組を計画・実践し，その中で教頭がどのような役割を担うことになるのかを整理・検証することが，研究のねらいである。

実際の取組として，①平城京跡オリエンテーリング，②世界遺産現地学習，③薬師寺・唐招提寺見学，④ＳＤＧｓと絡めた学習などが行われ，各取組が円滑に実施されるよう，教頭が事前の確認や日程の調整などの調整役を行った。

研究の成果として，児童は自分たちの校区にある世界遺産の学習を通して，自分の住む地域に誇りをもち，自分の住む町をより知ろうと主体的に学ぶようになったこと，今後の課題としては，世界遺産学習の指導に消極的な教員がいたため，全教職員で取組の意図を共有し，個人任せではなく，学校全体として取り組む必要性がある，と提言された。

提言後は，「教育活動に関する課題やビジョンを地域と共有し，協働しながら教育活動に取り組む魅力ある学校づくりにおける教頭としての関わり方」を柱にグループ協議が行われた。学区内に「鶴」という漢字の入る地名が多いことに注目した総合的な学習の時間の実践や，商業施設が多い地区であることを利用した実践等が紹介された。各校で工夫しながら地域の教育資源を教育課程に反映させており，貴重な情報交換の機会となった。

後半は，岩手県遠野市立遠野東中学校の小田島篤史先生から「中学校区の小中連携，小小連携の取組における副校長の役割－外国語教育の推進を通して－」という内容で提言が行われた。教育課題の一つである外国語教育の小中接続について，中学校区にある既存の研究組織を生かした取組を活性化させるための，副校長の関わり方・役割を，実践を通して明らかにすることが，研究のねらいである。

実際の取組として，①副校長会の提案による部会編成の改善，②諸調査（教研式学力調査ＮＲＴ等）の結果分析による課題の明確化，③授業実践研究，④外国語教育部会通信の発行，⑤外国語教育部会の協議が行われた。特に⑤では，授業実践交流会や授業交換会において，言語活動の工夫，ＡＬＴの活用方法など，各自の授業実践に基づいた協議が展開され，これまで以上に小中連携の充実につながっていた。

成果としては，外国語の授業研究を目的として集まった参加者による研究体制が確立されるとともに，その研究について参加者の勤務を調整したり，通信の発行・配布を通して部会の活動状況を周知したりし，副校長の関わりを明確にすることができたことである。

今後の課題としては，外国語教育部会で確立した運営方法の引き継ぎや持続可能な体制づくりがあり，特に中学校教員による乗り入れ授業の調整や外国語教育部会通信の発行についてはほとんど副校長が担っていることから，今後は副校長が推進役を務めながらも，部会員へ役割を付与し，主体的に運営を行っていけるような体制を整える必要がある，と提言された。

提言後は，「副校長・教頭がリーダーシップを発揮し業務を進めていく際に，他の教員の協力や支援を受けて進めていくためにはどのような工夫が考えられるか」を柱に，前半のメンバーを組み直して新しいグループで協議が行われた。「まずは校長のビジョンを教員に理解してもらう」「小規模校の強みを生かし，行事等において日常的に教職員全員で取り組む」「学校へのクレームなど，さまざまなトラブル対応において，互いに話し合う場を設定し，調整を図る」など，活発な意見を交わすことができた。

本分科会の提言内容や協議から，各校の課題には共通点が多いものの，その課題解決では各校がそれぞれの実態に即した実践・対応を行っており，その調整役として副校長・教頭が役割を果たしていることが分かる。その具体的な内容についても参考となる部分が多い提言・協議であった。

ただし，オンライン形式の協議では，互いの表情や雰囲気等を感じ取ることが難しいため，深まりのある協議になりにくいように感じた。次年度はぜひ集合形式で開催してほしいと願っている。

八戸小支部・町畑小　舘　　朋　美

【２日目　第２分科会】

課題「子供の発達に関する課題」

◆豊かな人間性を育む小中９年間の取組と教頭の役割
～学校・地域連携カリキュラムの作成を通して～

山口県周南市は「学校・地域連携カリキュラム」を中学校区ごとに，学校運営協議会の委員，児童生徒と教職員が協働的に作成に参加している。児童生徒の豊かな人間性を小中９年間で育むことを目指した具体的な実践例と教頭の役割について紹介された。

「学校・地域連携カリキュラム」は，「グランドデザイン」と「９年間の単元配列表」から構成されている。「グランドデザイン」は家庭や地域との理念の共有を図るもので，学校・地域の課題，育てたい子供の姿，中学校区や各学校の教育目標などが整理されている。「単元配列表」は，「グランドデザイン」にまとめたことがらを，９年間を通してどのように育んでいくか，総合的な学習の時間や各教科等の関連性を示しながら整理したものである。

この「学校・地域連携カリキュラム」を維持・継続するための教頭の役割として①小・中学校間の既習内容の把握や体制づくり，②カリキュラムが学習内容を反映するよう教職員への助言，③外部との連携がある。従来の「連絡・調整」以外の役割も重要であるということが実践を通して明らかになった。

参会者からは，「中学校区で９年間を見通したカリキュラムを作成し，更に地域や教職員だけでなく，児童生徒が作成に参加していることも先進的である。」といった感想が多く出された。

◆小中の発達を生かした地域社会との連携・協働
～地域の教育力を生かした豊かな心の育成のための教頭の関わり～

秋田県では，ふるさとのよさの発見や愛着心の醸成などをねらいとした「ふるさと教育」を学校教育共通実践課題として推進している。県内でも人口減少が著しい能代市山本地域において，学びの連続性を生かした学校間の円滑な接続・連携（小中連携）や，地域と学校が目標を共有して行う「連携・協働」型の活動（学校運営協議会制度）を推進するため，地域の教育力を生かした特色ある取組の実践例と教頭の役割について紹介された。

関係機関や学校運営協議会委員等を含め50名を超える応援隊を立ち上げ，その応援隊が主体となり学校を盛り上げる祭りを開催した実践や地域の人材不足で実施困難だった郷土芸能を，他地区の生徒も参加する体験学習会として開催した実践などが発表された。

教頭の役割としては，関係機関との連絡調整はもちろんだが，「組織的な動きにするための校内体制整備」として，地域学校協働活動について教職員や児童生徒が評価する場が設定されていた。活動を振り返り，成果と課題を学校と地域が共有することで，地域における目指す子供像の浸透につながると共に，学校教育への理解と協力にもつながる効果も期待できる。

オンラインによるグループ討議では，地域コーディネーターが設置されているか否かによって，教頭の負担や地域を巻き込んだ教育活動にかなりの差が見られると感じた。地域・学校に任されるだけでなく，行政のリーダーシップも必要であるという意見も挙がった。

◆子供たちの豊かな人間性を育むための地域連携の在り方

岩手県和賀地区では，学校・地域連携活動について地域住民にもアンケートをとり，学校と地域の連携の必要性や地域が学校に期待することについて捉えた。既存の活動と共に，実情に沿った計画を推進するよう研究した成果と課題について紹介された。

「地域産業と関連させた体験学習」「地域のつながりを大切にする防災学習」などを通して，「関わる力」「コミュニケーション力」「表現力」「行動力」「他を思いやる力」等の育成につながり，身近な地域素材や人材を活用することで，学習や地域への理解が深まるということが成果として挙げられた。

その一方，地域と学校で温度差がある場合の対応について課題が挙げられた。地域の思いや学校のねらいを踏まえ，双方の願いを確実に捉えて地域連携活動に反映させることが重要である。

指導・助言の中で，「コミュニティースクールに正解はない」「支援とは，依頼された人が行う行為のこと。連携とは，同じ目的に向かって取り組むこと，協働とは，同じ目的に向かって個々の役割を個々のタイミングで行うこと。その見極めが大切。」という話が印象に残った。

残念ながら，完全オンライン型による全国大会となったが，各地区の実践や実態，先生方の努力や熱量を感じるまたとない機会をいただけた。

知っておきたい 職場の法律

定年引き上げについて

県教育庁教職員課

平均寿命の伸長や少子高齢化の進展を踏まえ，豊富な知識，技術，経験等を持つ高齢期の職員に最大限活躍してもらうため，定年引上げに係る国家公務員法が改正され，併せて，地方公務員法が改正されました。これを受けて，本県においても職員の定年等に関する条例が改正され，令和５年４月１日から定年が段階的に引き上げられるとともに，管理監督職勤務上限年齢制や定年前再任用短時間勤務制が導入されます。

本稿では，定年引上げに伴う諸制度の概要について取り上げます。

１　定年の段階的引上げ

⑴定年引上げ

現行60歳の定年を令和５年４月から２年に１歳ずつ段階的に65歳まで引き上げる。

【生年年度と定年年齢】　（歳）

年度	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14
定年年齢	60	61		62		63		64		65	
S37年度生	60										
S38年度生	59	60	61								
S39年度生	58	59	60	61	62						
S40年度生	57	58	59	60	61	62	63				
S41年度生	56	57	58	59	60	61	62	63	64		
S42年度生	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65

※網掛けが定年。

⑵定年引上げの例外

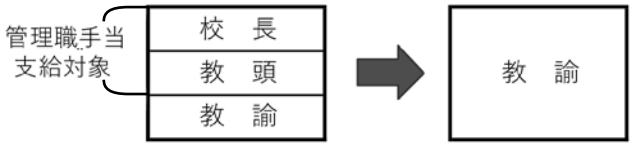
職務と責任の特殊性・欠員補充の困難性が認められる職員の定年年齢について，70歳を上限に特例として引き上げるもの。本県では，現在，医師・歯科医師を対象に65歳としているものが70歳に引き上げられるが，学校職員については引き続き適用しない。

２　管理監督職勤務上限年齢制（役職定年制）

管理監督職（校長，教頭，事務長）の職員を管理監督職勤務上限年齢に達した日の翌日から最初の４月１日までの間に，管理監督職以外の職に異動させる制度。管理監督職上限年齢は60歳とし，異動日は，管理監督職上限年齢に達した日の翌日以後における最初の４月１日を想定している。

役職定年した職員の職については，校長・教頭であれば教諭，事務長であれば総括事務主幹とし，その他の職員については，60歳定年時と同じ職とする。

【定年引上げ後の職の構成（教育職）】

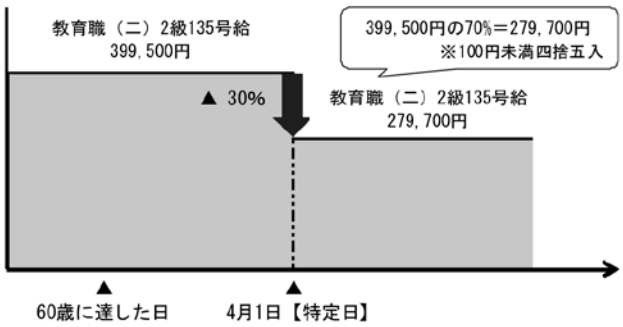


３　給料月額及び退職手当

⑴給料月額

定年引上げに伴い，60歳到達後の職員の給料月額の水準は引き下げられるが，当分の間，職員が60歳に達した日後の最初の４月１日（特定日）以後の給料月額は，その者に適用される給料表の職務の級及び号給に応じた額の７割とする。

【定年引上げ後の給料月額のイメージ】

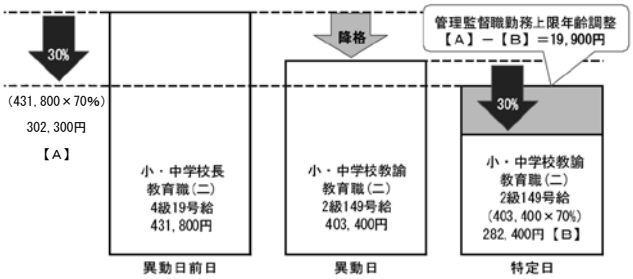


なお，教職調整額を含め給料月額等に一定率を乗ずる手当については，給料月額が７割水準となることにより当該給料月額等に連動した額となる予定であるが，扶養手当や通勤手当等，手当額が給料月額等と連動しない手当については，60歳以前の手当額と同額となる予定。

⑵役職定年による降任等をされた職員の給料月額

役職定年による降任等をされた職員の給料は，当分の間，７割措置後の給料月額のほか，支給額が役職定年により降任等をされた日（異動日）前日の管理職として受けていた給料月額の７割水準の額となるよう，調整額を給料として支給する。

【役職定年による降任等をされた職員の給料月額のイメージ】



⑶退職手当

定年引上げに伴う給与減額後に退職する職員の退職手当について，定年引上げ前と比較して不利益が生じないよう，特例が設けられた。

・定年引上げに伴い60歳超の期間の給与が減額となる職員に対する退職手当の基本額の算定方法の特例（いわゆる「ピーク時特例」）を適用。
・特定日以後に定年前の退職を選択した職員の退職手当は，自己都合退職であっても，当分の間，「定年」を理由とする退職と同様に算定。

４　定年前再任用短時間勤務制

60歳に達した日以後，引上げ後の定年前に退職した職員を短時間勤務として退職前の定年退職日まで採用する制度。任用は選考により，任期は退職前再任用の日から定年退職日相当日までとなる。

勤務時間は知事部局及び教育委員会事務局と同様に週19時間22分30秒を想定しており，実際の勤務については，校長が業務上の必要性等に応じて，４週間を１単位として割り振ることとなる。

なお，定年前再任用短時間勤務制による職員は，非常勤職員となることから，退職手当については，常勤職員として退職する60歳到達年度の年度末に支給されることとなる。

５　暫定再任用

定年が段階的に引き上げられる経過期間において，65歳まで再任用できるよう，現行再任用制度と同様の仕組みを措置する制度。任用は選考により，常時勤務または短時間勤務を選択可能とする。ただし，現在の再任用職員及び令和４年度に定年退職する職員については，公務能率維持の観点から，原則として常時勤務の任用とする。

なお，暫定再任用職員制度については，定年引上げ前の再任用制度を基本とした取扱いとされていることから，給与制度についても現行の再任用制度に準じた取扱いとなる予定。

【暫定再任用制度の年齢】

年度	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14
定年年齢	60	61		62		63		64		65	
S37年度生	60	61	62	63	64	65					
S38年度生	59	60	61	62	63	64	65				
S39年度生	58	59	60	61	62	63	64	65			
S40年度生	57	58	59	60	61	62	63	64	65		
S41年度生	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	
S42年度生	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65

※網掛けが定年。太枠は暫定再任用期間

６　情報提供・意思確認

職員が60歳に達する年度の前年度に，60歳に達する日以後に適用される任用，給与，退職手当の制度に係る情報提供を行い，60歳に達する日以後の勤務の意思（又は退職の意思）を確認する。

７　その他

⑴　人事評価については，60歳以降定年前までに勤務する常時勤務職員，短時間勤務職員及び暫定再任用職員のいずれも対象となる予定。

⑵　現在55歳（定年から５年を減じた年齢）から申請可能となっている高齢者部分休業については，定年引上げに伴い対象年齢が引き上げられる。

編集後記

７月28日(木)・29日(金)に岩手県で開催された第64回全国公立学校教頭会研究大会（兼東北地区小中学校教頭会研究大会）では，東北ブロックは参集しそれ以外はオンライン参加を予定していましたが，開催日間際の新型コロナウイルスの猛威により，全ブロックがオンライン参加に変更となりました。対面での協議等で各地の教頭先生方と交流を深めたいところではありましたが，オンラインでも学ぶことの多い協議であったことが寄せられた記事から伝わってきました。

新型コロナウイルス感染症については，今後インフルエンザと同時期流行が予想されています。第７波とは比較にならない感染者数が予想されています。児童生徒や教職員の健康と学びを守るため，三密回避，手指消毒，換気等の当たり前の基本行動を確実に行うことが大切であると肝に銘じています。

青森県小中学校教頭会会報 あおもり　第115号　令和４年12月16日　印刷発行　発行所　青森県小中学校教頭会　編集責任者　広報委員会　印刷所　(有)アート企画